

「JICEラボラトリー・トレーニングの変遷」

— その1 —

第1回教会集団生活指導者研修会から

第10回教会生活研修会まで



■ 中 堀 仁四郎（南山短期大学助教授）

はじめに

「■本に於けるTグループ・トレーニングの動向」について書くのが私に与えられた課題であった。Tグループが我が国に導入されたのは1950年代の後半である。60年代後半から70年代中頃にかけて、企業の間関係訓練としても一種の流行をみたが、その後その勢いは衰え現在では僅かの団体がTグループという名称を用いた訓練を行っているにすぎない。一方、Tグループが下火になった頃より、エンカウンターグループに盛んになってきている。Tグループトレーニングの動向を捉えるにはこれらの情報が必要であるが、私の手許にはTグループトレーニングの紹介を行ったような文献はあってもTグループの実際の動向を遡るような資料が殆んどないことを発見した。ただ少しあるとすれば私が過去20年余りかかわってきた、JICE—立教大学基督教教育研究所—のヒューマンリレーションズ・ラボラトリーに関するもので、自分の参加した研修会のTake-Home-Kit.とその時の記憶である。書くとしたら我が国のTグループ動向ではなくて、まずはJICEのラボラトリートレーニングについてである。常々やりっ放しにしてきた自分をふりかえる機会にもなり、資料を集めて整理しておくいいチャンスでもあると思い、まずは手許にある資料をもとにJICEトレーニングの歩みとその変化を眺めてみることにした。

この20余年間に、ヒューマンリレーションズラブをはじめ、その他、コミュニケーション開発ラブ、組織開発ラブ、自己啓発ラブ、聖書研究セミナーなど、さまざまの、また数多くのJICEトレーニングが実施されてきた。この間に、参加者としてまた、スタッフとしてこれらにかかわった者の数は3,000人をこえると思われる。JICEのトレーニングの運動はこれらの多くの人々によって進められまた、これらの人々を通して我が国の教育・トレーニング界に大きな影響を与えている。現に南山短期大学に人間関係科が設置された時の一方のきっかけはJICEトレーニングの影響によるものであった。JICEトレーニング活動もずい分と長い歴史と広がりをもっているのである。

今回はそのJICEのラボラトリートレーニングのうつり変りを追っていくのであるが、まずそのはじまりとなった第1回教会集団生活指導者研修会から第10回教会生活研修会までをとり上げることにする。JICEトレーニングのその後の方向はこの第10回研修会までに起った変化によっておおよそ定まったと思われるからである。

なお、本文では第1回教会集団生活指導者研修会については、目標、前提、構成要素についてのべ、その他の研修会については、各回ごとの変化や特徴となったと思われることを記すことにした。全体を通しての変化は、最後に付した資料一実施日程表及び目標一を参照して頂きたい。

I 第1回教会集団生活指導者研修会

世界キリスト教協議会、日曜学校協会主催の第14回基督教教育世界大会の一行事として、第1回教会集団生活指導者研修会(Laboratory on the Church and Group Life)が、1958年7月21日より8月1日、11泊12日の日程で山梨県清里の清泉寮で開かれた。アメリカ聖公会およびカナダ合同教会より10名の指導者をスタッフとして迎え、参加者には日本のプロテスタント教会各教派の教職者、教師、宣教師の中から英語に特に堪能な35名が選ばれた。ほとんどの参加者はグループ・ダイナミックスに関することは勿論のこと、ラボラトリー方式による研修会に関する知識は持っていなかったと思われる。

研修会の目的

この研修会の目的は次のようにのべられている。

「教会の共同体的生活は、キリスト教信仰の伝達のための基本的媒体である。聖霊の力が各個人を我らの主にあって一つとしているようなキリスト者のグループは、日常の生活に直面し、互いに分ち合うような統一を具体的に示すことによって、此の世に対し、福音の力を宣揚するものである。キリスト者の共同体のこの意味は教会内において、知られるべきであるほどに充分には知られていない。従って、このラボラトリーの目的は、グループ・ライフへの我々の関わり具合に影響をおよぼす諸要因、諸力を探究することである。実験的特殊状況下で、これらの諸力に対してよりセンシティブになり、教会内のリーダーとしてより創造的、応答的になることをめざすのである。」

即ち、教会の信徒のあらゆる具体的生活の場面で「分ち合い」と「交わり」を実現し、キリストの体としての共同体の意味を実現するために、この研修会の参加者が集団の中に働く諸要因、ダイナミックスに対する感受性を増し、リーダーシップ能力を高めることがこの研修会の目的であった。

ラボラトリーとしてのこの研修会の前提

この研修会は、その英語名にあるごとく教会集団生活についての“ラボラトリー”であった。開会に際し、いくつかのラボラトリーの特徴がのべられている。

- (1) ラボラトリーは特定の限定された領域の知識を取扱う。それは、1つの分野で展開するように設計され装備されている。このラボラトリーは、集団生活のフィールドで展開するように設計されている。
- (2) ラボラトリーは隔離された状況である。ここでは日常の煩雑さを離れ、我々は我々の関心のある領域を浮ぼりにし、より注意深く探究することが出来るのである。それは“文化的孤島”とも言うものである。この意味では、ラボラトリーは“人工的”である。しかし、我々はここで相互の関係の中に生きている。つまりここでの生活には限界があるが、しかしなおそれは真実な生活である。
- (3) ラボラトリーは、それ自身の生活の中で生み出された素材を取扱う。我々の研究する集団生活(グループ・ライフ)は我々がここにつくり出すグループライフである。我々の観察する諸力は我々の生活 — トレーニンググループ、プラクティス・グループ、そして、このラボラトリーでのその他のグループに於て— に影響を与えている諸力である。
- (4) ラボラトリーは特定の目標と、それを達成するためにデザインされた方法からなっている。我々の目標は、メンバーとして、グループ状況での自からの行動を向上させることである。ラボラトリーではいろいろのものを組合せてこの目標を達成することを助けるように設計されている。またラボラトリーは試みの場でもある。

研修会の構成要素

「礼拝」、「理論セッション(セオリー・セッション)」、「トレーニング・グループ(Tグループ)」、「プラクティス・グループ」、各セッション後に行われた「PMR(反応票)」, 研修会の途中で行われたスタッフと参加者が、その理解度、ニード、反応などを「評価」する面接などが研修会の目標を達成するために用いられた方法的構成要素である。

標準的 1 日スケジュール

| | | | |
|---------|----------------|---------|-------------|
| 午前 7:00 | 礼拝 | 午後 2:00 | プラクティス・グループ |
| | | | (P) |
| 7:30 | 食事 | 4:00 | |
| | | 4:30 | 入浴 |
| 8:30 | トレーニング・グループ(T) | | |
| | | 6:00 | 夕食 |
| 10:30 | 休けい | | |
| | | 7:30 | 礼拝 |
| 11:00 | セオリーセッション | | |
| | (Th) | 8:00 | 夜のセッション |
| 12:30 | 昼食 | | |
| | | | |

各構成要素について次のように記されている。

セオリー・セッション (Th)

「(1) 社会科学の研究成果である理論やこれまでのラボラトリーで得られた経験などの中からグループ生活に役立つと思われるものを提示し、(2) このラボラトリーでの体験や洞察を整理したり、説明したりする。」

トレーニング・グループ (T)

「トレーニング・グループは、ラボラトリーの中で特別につくられたグループで、そこでの研究のための基本的データは、そのグループ生活の中に実際に起っていることがらである。グループ内でのトレーナーの役割は、そこに起っている事柄をグループが理解するのを助けることである。グループ内のリーダーシップや、そこで行われることはグループ自身によって決定される。このグループでは、これまでとはちがった他の人との関わり方を見つけだしたり、また それを試みたりして、自分の行動やグループに対する影響を知ることが可能である。また、グループの生活や 行っていることについて考えたり、腹の底で感じたりしていることを表明する自由も存在する。」 —1グループ参加者12名、トレーナー1名— の編成でメンバーは固定、全部で3グループがあった。

プラクティス・グループ (P)

「このグループでは、メンバーは、(1) 小グループ内に働く諸力を認知するスキルをのぼし、(2) それらの諸力を扱う適切な方法を練習することができる。」
参加者9名、トレーナー1名の編成、全部で4グループがあった。

研修会の学習過程

ラボラトリーは前述の構成要素を組合せながら進められるのであるが、ここでは参加者は主体的な体験学習をするのであり その学習は 参加者の行う、(1)経験 (Experience) (2)反省 (Reflection) (3)表象 (Symbol) (4)秩序 (Order) の過程をふんで深められる。このラボラトリーでは、第1の段階と第3段階から入った。即ち、TグループとPグループは第1段階からはじめ、理論セッション (ある程度はPグループに於ても) は第3段階からはじめた、ということがラボラトリーの終りの部分で確認されている。

研修会の展開

| | 7月21日 | 22日 | 23日 | 24日 | 25日 | 26日(土) | 27日(日) | 28日 | 29日 | 30日 | 31日 | 1日 |
|-------|---------------------|---------------------------|---------------------------------------|---------------------------------------|---|--------------------------------|---|---|--------------------------------------|--------------------------------|----------------------------------|---------------------------------------|
| 午前(1) | | T ₁ | T ₂ | T ₃ | T ₄ | T ₅ | | T ₆ | T ₇ | T ₈ | T ₉ | T ₁₀ |
| 午前(2) | | Th ₁ M.I.T. | Th ₂ プロセス とコンテ ンと | Th ₃ チェアマ ンのスタ イル | Th ₄ シェアー ドリーダ ーシップ | Th ₅ メンバー の機能 | | Th ₆ コミュニ ケーション の障害 | Th ₃ 集団圧力 と集団基 準 | Th ₉ ネガティ ビティ | Th ₁₁ 社会的変 革 | Th ₁₂ グループ の発展段 階 |
| 午後 | | P ₁ 観察 | P ₂ ロールプ レイ | P ₃ チェアマ ンのスタ イル | P ₄ 大集団へ の参加の 問題 | | | P ₆ 観察機能 | P ₇ 集団決定 | | P ₈ 持って帰 るもの | T ₁₁ まとめ P L R |
| 夜 | 開会 オリエン テーション | 「教会の 観命」 | | インクレ ストグル ープ | | | P ₅ 「参加」 P ₄ の全 体発表会 | Th ₇ 権威と権 威主義 | | Th ₁₀ 逸脱者の 問題 | インクレ ストグル ープ 参加者の タペ | 閉会 |

図1. 第1回教会集団生活指導者研修会日程表

研修会の1日は、Tグループで始まっている。Tグループで、メンバーは参加者としてグループ内の様々の事象を経験し、同時にそれを観察する。メンバーが互いに認知した今ここの出来事を、フィードバックし、共有化する。その過程はまた新しい事象をグループの中に生み出すのである。

Tグループに続いて、理論セッションが持たれる。ここではTグループに起っていることに関係のあると思われる理論が提示される。この提示は講義、スキット、バズなどの手法を用いてなされる。これはTグループの体験を整理し、理論として深めることを目指しているものと考えられる。

午後には、PグループがTグループとはちがったメンバー構成で行われる。Tグループと比較してよりはっきりと構成化された小グループで、グループ観察、ロールプレイング、司会者のスタイル、変革の技法、などのグループ・スキルを参加者が現場(Back Home Situation)で活用できるように訓練する。

夜は自由又はその他の領域の問題—「神学と研修」など—を取扱う時間として用いられている。

この1日の流れは、今ここの体験をする、理論を学ぶ、スキルを習得する、この三つからなっており、前述の「体験学習の過程」をスケジュールの上に組み込んでみると見ることできる。この三つの要素ははっきりと区分され、しかも同じ程度のウエイトをもって組まれている。全体を通してTグループ11回、理論セッション12回、Pグループ8回がもたれている。これはいわゆる「体験」、
「理論」、
「スキル訓練」の三本柱による構成である。

理論セッションで取上げられた主題は、「グループの欲求」、「司会者のスタイル」、「リーダーシップ」、「メンバーの機能」、「コミュニケーションの障害」、「権威と権威主義の問題」、「集団圧力と集団基準」、「ネガティブティ

「逸脱者の問題」, 「社会的変革」, 「グループの発展段階」である。その配列はTグループ発展と並行させているようにみられるが、全般を通してグループの参加, グループの組織化, 社会変革など, グループの社会学的な側面を強調した理論が提示されている。

研修会の特徴

この研修会の構造は、初期のベゼルの三週間のラボラトリーを2週間に短縮して、アメリカ聖公会教育局が行っていた Laboratory on Church and Group Life とほぼ同じものであったと思われる。この研修会の特徴は、グループの諸要因に対する感受性をつよめ、グループでの行動能力, スキルを身につけ、グループ, 組織を民主的かつ効果性のあるものにする変革体 -チェンジ・エージェント- をそだてることを目的とし、グループの社会学的, 心理学的側面を強調したところにあった。

Ⅱ 第2回から第10回研修会まで

第1回研修会の参加者のあるものは強力なインパクトをこの研修会より受けたものと思われる。彼らはその後自主的研究会を続けた。その結果2年後に第2回研修会が開催されることになり、その後に立教大学キリスト教教育研究所 Japan Institute of Christian Education - JICE - が設立され、その後のトレーニング活動をすすめることとなった。以下第2回研修会から第10回研修会までの研修会のうつり変り、その特徴を追っていく。

第2回研修会から第4回研修会まで

2年後の1960年に開催された第2回教会集団生活指導者研修会は、アメリカ聖公会より4名のコンサルタントを招いて、第1回研修会の参加者で研究会を続けていた者たちがスタッフとなって実施された。第3回研修会は更にその二年後の1962年に、はじめて日本人だけのスタッフによって開かれている。この2つの研修会は日程表にあらわれた限りでは、第1回研修会とほぼ同じである。(資料:参照)第3回研修会が日本人の手で開かれるまでには4年の経過がある。この間に、第1回研修会の経験の消化の努力が精力的に行われたものと思われる。

第4回研修会は、特に外■人宣教師と日本人教役者の相互理解を深めることを意図して行われた。研修会の構成, 進め方には大きな変化はなかったが研修会の目標(ねらい)に「……参加者全員 - 参加者, スタッフとも - が出会いの体験をする場であります。」と明記されている。

またPグループ(プラクティス・グループ)の呼称が第3回研修会で「実験グループ」に、第4回研修会では「Eグループ」(Experimental Group)と変わった。Eグループは「10人前後の小グループである。そのグループのメンバーは、この研修会において経験しつつある人間関係の凡ゆる問題を整理し体系づけ

るために実験的に研究する。そしてその体験がメンバー各自の集団生活における生きた技能 (Skill) として身につくようにする。」と説明されている。これは、P グループの役割を研修会全体の中でよりわかりやすくするための変更であった。E グループでは、T グループとかG セッションと関係なしにグループ・スキルを練習するのではなく、T グループや、理論セッションで得たものを Experimentally にたしかめ、総合することを強調したのである。

以上第 2 回から第 4 回までは、アメリカより移植されたラボラトリーを我が国の土壌に根づかせる努力がなされた時期であったといえよう。

第 5 回教会生活研修会

はじめて産業界から教育担当者の参加があった。実施日程表によると、T グループの回数が増し、E グループが減っていることがわかる。E グループに比べて、T グループの体験が参加者に強く受けとめられることがあったからだと思われる。例えば、T グループで丁度トレーナーの権威が問題になっている時期に、E グループが始まってトレーナーが指示的に進めようとしてもうまく受け入れられなかったりすることも起るのである。この回のあるE グループは T グループ的な様子になったと報告されている。枠組のちがったE グループとT グループの関連づけについての不満が参加者から出され、この 2 つを結びつけることの難しさを示している。また、この時より J I C E 所長の菅岡吉氏による聖書研究が行われている。その他、従来、理論セッションと言っていたものが、G セッション (General Session) と呼ばれるようになっていく。「理論」という響きが与える先入観を避けること、E グループとの関連づけをもたせること、より自由な効果的提示方法を用いていけるように、といったことがこの変更の理由であった。第 3 回からはじまったP グループから、E グループへの名称変更、またこの理論セッションのG セッションへの変更は、研修会のそれぞれ構成部分での体験をより密接に結びつけようとする努力のあらわれであったと思われる。

この研修会の特徴としては、実施日程の表面には それ程頭わになってはいないが、実質的にはE グループが予定より少なくなり、T グループによりウエイトがおかれる結果となったことである。この傾向は第 6 回研修会で更に顕著になってくる。

第 6 回教会生活研修会

前回の研修会に於て出はじめたT グループ重視の傾向は、この研修会に於てはつきりと表面にあらわれた。この問題はいわゆる「個人かグループか」、「感受性かスキルか」というとらえ方で議論された。第 6 回研修会スタッフによる準備研究会では、この研修会が教会にとってどのような意味があるのかが問題にされ、「研修会では、今この生きた体験学習を通してリーダーシップスキルを身につける」「グループの中で自分を理解し、感受性を養い、相互理解を深めていく、それによって変革が行われる」「教会生活ではグループを動かすスキルよりも、

個人が感受性をもつことによってこそ生きた交わりを体得できる」「人間関係の中に於ける自分への感受性を養うのであるが、グループ全体の動きを理解しなければ自分を理解することはできない」「個人とグループは分けて考えることは出来ない」等と話し合いがなされている。教会生活研修会の目標は、参加者が教会という現場で生かせるスキルを習得することであるが、グループ（対人関係）の中でこそ自己理解を深めることができ、自己理解は状況への感受性を生み、それによって、スキルも意味あるものとして生かされる、というのが大体の方向であった。その結果「Tグループではそこに生まれる対人関係を通して自己理解、他者理解を十分に深め、それをあとのグループ状況でいかに生かすかをさぐり、スキルの問題に移っていく」、「Tグループをすゝめていけば自然にEグループに移行していくのではないか」などの考え方が出されている。

Eグループについては、「TグループとEグループの体験を一つにしてしまうといっても、スキルの訓練は残しておきたい。」「Tグループをある程度行って、それを打切り、Eグループに移っては。」などの話し合いがなされ、結果としてGセッションにEグループ的なものを合流させることにきまっている。

上のような予定のもとに実施された研修会では、Eグループはなくなり、Tグループが1日3ないし2回、9日目までに18回が行われ、Tグループを終わってからの最後の2日間は参加者によるタウンミーティングで「ここでの体験を有効にするためには残りをどう過すか。」と方向をさぐり、あとNグループ（新しいグループ）をつくり「今迄の体験で自分のもっている課題を追求する」「生活の場に於てLabの体験をいかに生かすか」という問題をとり上げている。これはTグループからEグループへ、あるいはEグループの要素をGセッションの中に含めたものである。

第6回研修会は大きな変化があった。Tグループの“今ここ”での体験を通して、個人が自己についてより深く学ぶ方向に進んだとみることが出来る。しかし一方では研修会の学習体験を現場に生かすという立場からグループ・スキルの習得に強い関心もたれており、この2つの側面をいかに研修の場で結びつけていくかがその後の課題となっていた。

第7回教会生活研修会

11日間の研修会期間中、はじめの8日間にTグループを16回行い、あと3日間はEグループを集中して行っている。これには2つの理由があったと思われる。1つは、第6回研修会に於て問題にされていたことであるが、Tグループに対する考え方が初期のものとは変化してきたことである。即ち、Tグループは“今ここ”を強調し、その中で自己理解、他者理解を深め、グループ成長を体験することであり、その体験を十分に深めるため、スキル習得のEグループは後方にもって来るのが有効であるという理由である。もう一つは、Eグループを効果的に行うために、集中して時間をとるのがよい、という理由である。

このようにして後の部分に集中されたEグループでは、4つのEグループが、「Tグループで起った問題のケース・スタディ」「子供にかえってのゲーム」「ロールプレイングと観察」「印象テスト」などを行っている。このEグループでは、トレーナーはグループのニーズに応じて資料を提供する者であり、グループの自主的活動が強調されている。第7回研修会では、TグループとEグループを切りはなすことによって、従来生じていた2つのグループの体験を並列させることによって生ずる混乱や抵抗を避けようとしたのである。それはTグループの体験を研修会での中心的なものとして深めるとともに、そこで得たものを新しい状況の中いかに移しかえていくかをさぐっていく試みであった。

第8回教会生活研修会

この研修会では、再び“Tグループと理論、そしてスキル”のいわゆる“三本柱”が強調される。Eグループは比較的はやくから長い時間をとって行われる。研修会準備研究会で“三本柱”で進めることが主張され、TグループとEグループとは別にして行うという考え方が確認されている。この回は、TVカメラによるTグループ観察が研究者グループによって行われている。

第9回教会生活研修会

Tグループ22回、Eグループなし、Gセッションは前半に「感情表現」「Tグループの体験の問題点を考察する」「クリエイティビティー創造性」などが行われたことがこの第9回の特徴である。「クリエイティビィ」とはグループで様々な素材を用いて自己を自由に表現するもので、Tグループ体験を言語以外の方法で表現しとらえることによって学びにもなり、かつTグループの動きを促進する働きをするのである。後半では「グループの問題解決の過程を学ぶ」「Tグループで問題を選び解決する」などが行われ、Tグループの発展したのとしてGセッションをねらっている。Eグループがなくなったことについて、「従来、現場適用への工具箱としてEグループが考えられていたが、参加者の自由で創造的生き方を発現する場として現場適用の道具は自からが創造的に生きることであり、他から与えられるものでない。Tグループ中心ですすめられていくなれば、その発展過程の中でEグループの意味するものが同化されてくる」という考え方があった。

Tグループ、理論、スキル、の三本柱について「三本柱で行っていた初期のベセルでのラボラトリーは8週間もの長期にわたるものであり、同じことを10日間で行おうとしても無理があるのは当然である。従って、GセッションやEグループで行っていたことは、次にもたれる継続のラボラトリーにまわすべきである」と言う理由づけもあったようである。第9回研修会はこれらの考え方もとづいて、Tグループ中心に進められ、グループの領域に関すること

よりも，個人及び対人の領域を主に扱っている。

第10回教会生活研修会

この回より期間が7日間になった。期間の短縮にもかかわらず，Tグループは18回行われた。GセッションはTグループの発達を促進することを意図して行われている。前日のクリエイティビティと同じように，Gセッションに新しくムーブメントが加わっている。これは身体を動かして自己表現を行うものでTグループで体験していることを言語以外の方法で表わすことで，自己への気づき，他者へのかかわりを促進するものである。このように第10回研修会はTグループ中心に進められた。

研修期間の短縮は，参加を容易にするためでもあったが，研修を2つに分けて，Tグループ中心のものを基礎訓練とし，現場適用のためのスキルトレーニングはある期間をおいて行うことが効果的であるという考え方から行われたことでもある。実際に，1964年から毎冬「JICEトレーニング・セミナー」が清里で開かれており，教会生活研修会にすでに参加した者が出席し，トレーニングの応用，現場適用などについて研究をする機会となっていた。1968年からはこのセミナーが，夏の基礎研修に対するフォローアップセミナーとして用いられるようになっていく。以後このトレーニングを2分する方式は第14回ラボラトリーからのⅠ部，Ⅱ部制，第17回からの基礎訓練としてのヒューマンリレーションズラブ，と継続訓練としての組織開発ラブ，自己啓発ラブ，教育計画ラブなど各種のラボラトリーやセミナーの開催へと発展していったのである。

Ⅲ ま と め

第1回教会集団生活指導者研修会から第10回教会生活研修会までの間にあった変化を研修会の Take-Home-Kit 一研修会参加者に渡たされる資料一，研修会準備研究会記録などを手がかりに見てきたが，これらの資料のみでは，実際にその研修会がどのようなものであったか，たとえばTグループやEグループの展開，トレーナーの介入の傾向といったことはほとんど把握できなかった。しかし日程表にのこされたTグループ，Gセッション，Eグループの組合せ順序，目標のステートメント，提示された理論やGセッションの内容などから各研修会の特徴をある程度はつかむことが出来たし，それを比較することで変化を知ることができた。

各研修会の目標のステートメントでいうならば，第8回研修会までは，第1回研修会の「グループ生活に影響を与える諸要因と諸力に対する感受性を増し，教会内のリーダーとしてより創造的，責任あるものとなろうとする」が目標であったとみることができる。第4回研修会では「研修会は，参加者全員が出合

いを体験する場であり、おたがいが自由かつ責任ある主体として人間関係の中に作用する要因及び自己に目を開いてこの期間の生活を共にする」とのべられている。この研修会が特に外国人宣教師と日本人教会指導者との相互理解の増進を意図していたということもあり、研修会の今そこでの出会いを強調したともみられる。第5回研修会から第7回研修会までは特にステートメントとしては残されていない。委員長の“あいさつ”として口頭でのべられたものと考えられる。第8回研修会では、「……今ここでの出会いを体験する場です。集団生活におこる事柄に気づき、自己に対して目を開き、お互いが自由且つ責任ある主体として生きることを学ぶ」と記されており、今ここでの出会い、起っていることと自分への気づきを強調している。第9回研修会では、「集団生活の中で自己、他者のあり方を体験し、効果的・創造的な生き方を発現する」となっている。個々人が自己実現をして生きる そこにある出会いを目標としているように受けとめられる。第10回研修会では委員長のあいさつとして、「自分がどのような行動をしているか、それはどんな結果を生んでいるか そこでは自分の中にどのような感じ、思い、考えが流れているか、を体験的に感じとり、自分がより自然に存するための新しい生き方、動き方を見出す」とのべられている。

以上を通してみると、初期のものは、教会のリーダーとしてのスキルの習得、責任ある、創造的なあり方、を目標としているのに対し後のものはより個人の成長と自分らしい生き方を見出すことが表面に出てきている。

研修会の構成要素とその組合せは主要なものとして、直接今ここでのグループ体験をするTグループ、理論（のちには、Gとなる）セッション、現場適用のためのグループスキルの練習をするPグループ、（のちにはEとなる）がある。第1回研修会では、これら3要素は全期間を通してほぼ同じ比重でおかれている。Tグループ（以下Tと略）11回、理論12回、Pグループ（以下Pと略）8回である。これは第4回研修会まではほぼ同じであるが、第5回研修会では、Tが14回、G（理論に相当する）は11回、E（Pに相当する）が5回となり、Eが減少し、Tが増加している。第6回研修会ではTが18回と増え、Eはなくなっている。このTの増加は第9回研修会には22回となりそれに従ってEがなくなったり、あるいは後半に集められたりしている。第10回では期間が短縮されTが18回行われ、GがTを助けるような形で行われている。このような構成要素の組み合わせは研修会の特徴を最もよく示していると思われる。全体を通しての変化はTグループによる個人内的な学習を深める方に向いており、それは第1回研修会に含まれていた多様な学習目的 素材を混乱をさけて効果的に学習し活用するために整理することであったと見ることも出来る。しかしそれは又何かを失うことになったかもしれないのである。

理論の内容については、第1回研修会から、第4回までは主にグループ理解のための、社会、心理学的な理論がTグループで体験したことを一般化するた

めの案内役として提示されている。第5回研修会では「理論」はGセッションと変り、第6回研修会でGで行われた理論提示は少なくなると共に、グループ理解に関するもの他に対人コミュニケーション、傾聴法などが入って来ている。第8回研修会では自分の体の動きに気づき、感じをつかむ、「フィーリング」というGがもたれ、第9回研修会では「クリエイティビティ」、第10回研修会では「ムーブメント」などがGの中に入ってきている。理論又はGセッションの内容をみると、初期にはほとんどグループ理解や変革のための理論であり回を重ねるごとに対人又は個人内領域の理論や自己表現を主としたGなども行われるようになっていく。この傾向は、Tグループが重視されていくのと重なり合っている。

以上のように見るならば、第1回研修会から第10回研修会までの変化は、集団生活を前提とはしているものの、初期のグループの社会的・心理学的理解をもとにしたグループスキルの開発についての関心から、次第に自己理解、対人理解、自己成長への関心へと移っていったのである。

研修会の構成要素及び組合せの変化についてはすでに述べたところであるが、この10年間に研修会の構成内容には大きな変化があった。一つの研修会を、いわゆるTグループでの体験、理論、スキル（適用）の三本柱で構成していた初期の研修会を、まずTグループを中心にした基礎研修と、現場適用を考えた継続研修とに切りはなしたのである。これを切りはなした理由としては、1つの研修会の中でのTグループ体験とそれ以外の学習方法がうまくかみ合わなかったということがある。Tグループの中での自からの感情や相手のうごきにかかわりだすとそこより抜け出せなくなる。他の要素が入って来ても邪魔になり混乱のもとになる、と見たからである。その結果、抵抗や混乱の少ない研修会へと形をかえていったのだと見ることができる。実際初期の研修会の終了時アンケートを見ると、混乱したままで終わっている人が比較的に多いのである。

しかしこの混乱、抵抗を取除くための研修会の構成要素の整理ということはいつの場合でもいいと言うものではないのではないかと思う。

ラボラトリーは、その発明者が意図したかどうかは知らないが、一つの枠組みの中である領域に関して、学習者がより多面的な経験を得られるように設計されているのである。参加者はその中で様々な、ときには異質の体験をする。そしてその体験と体験とを自から選びながら結びつけ統合していく時に学習がより全人的に起るのではないだろうか。このように考えていくと学習場面での混乱や抵抗をとりのけることが体験を統合するという学習者の貴重な作業を奪ってしまうことになる場合もあるのではないだろうか。

最後に、JICEのラボラトリーを発展させてきたものの一つに、“Pre-Lab”というスタッフによる“ラボラトリー”があるが、これにふれたい。研修会の都度そのスタッフチームが編成されると、開催の数ヶ月前に準備研究会を3泊4日或は2泊3日で行い、それまでの研修会の結果の検討、そこから

お互いが今回の研修会に持つ期待を出し合い、研修会のねらいを作りながら、どのような新しい変革をしていくかを話し合い、それについてのお互いの分担を決め宿題としてもって帰る。研修の始まるまる2日まえから第2回目の準備会、Pre-Lab を行う。今度は実際の参加者を念頭において準備がなされる、という風であった。前回は踏まえて新しいものを作り出す作業がなされてきたのである。スタッフも参加者も共に自からをそこに投げ込んで 学ぶ体験学習 EIAHの過程であるラボラトリーが各回の研修会毎に起らなければならないし、1回毎にそれを設営していくスタッフの側でも絶えずそれに挑戦しなければならぬとだと思ふ。作り上げたものを、次には、それを生かしながらもこわしていく作業がラボラトリートレーニングの一面にはあることをはじめの10年間の研修会の変化が教えてくれるのである。何事でもそうであるがトレーニングも定形化してくると安定はする。また参加者の満足度にもムラがなくなる。しかし「ラボラトリー」ではなく、「ラボラトリー・トレーニング」という定形訓練になってしまう。しかし時には「ラボラトリー」の冒険が必要なかもしれない。学校教育の場ではどうだろうか。

文 献

- ・「第14回基督教教育世界大会記録」 —1959年3月—
日本基督教協議会発行
- ・Take-Home-kit of Laboratory on Church and group life
Kiyosato, Japan. 1958, July 21 — Aug 2,
R. Aメリット「キリスト教教育の冒険」昭和37年 キリスト教学
立教大学キリスト教学科
- ・David R. Hunter : Christian Education as Engagement.
—1963—
- ・Dorothy L. Braun : A Historical Study of the origin and
Development of The Seabury Series of The Protestant
Episcopal Church.
Unpublished Ph. D. Thesis, New York University, —1960—
- ・菅 祝四郎 : 「日本で行われたセンシティビティ訓練に参加して」セン
シティビティ・トレーニング 解説篇—1 日本産業訓練協会, 昭和37年
- ・柳原 光 : 「ラボラトリー方式による人間関係訓練」 JICEシリー
ズ№1・ヒューマン・リレーションズ・トレーニング —1965—
立教大学キリスト教教育研究所
- ・「第2回 教会における集団生活指導者研修会記録」 —1960—
日本基督教協議会教会学校部 グループ・ダイナミックス委員会
- ・立教大学「JICE通信」第1—第15号 昭和38年4月—昭和42年12月
立教大学キリスト教教育研究所
- ・「第1回 教会集団生活指導者研修会記録」 —1958—
- ・「教会生活研修会 第3回 — 第10回記録」 —1962—1967—
立教大学キリスト教教育研究所



資 料

その1—教会生活研修会(第1回～第10回)実施年月一覧

1958年

7月21日—8月1日 第1回教会集団生活指導者研修会

1960年

7月18日—7月29日 第2回教会集団生活指導者研修会

1962年

9月4日—9月13日 第3回教会集団生活指導者研修会

1963年

2月12日—2月22日 第4回教会生活研修会

7月1日—7月11日 第5回教会生活研修会

7月31日—8月10日 第1回S・T・御殿場セミナー

10月1日—10月11日 第6回教会生活研修会

1964年

1月29日—2月1日 第1回JICEトレーニングセミナー

6月30日—7月10日 第7回教会生活研修会

1965年

2月9日—2月11日 第2回JICEトレーニングセミナー

7月6日—7月16日 第8回教会生活研修会

1966年

1月31日—2月2日 第3回JICEトレーニング研究セミナー

5月9日—5月19日 トレーニング・インスティテュート

7月5日—7月15日 第9回教会生活研修会

1967年

1月30日—2月2日 第4回JICEトレーニング研究セミナー

7月16日—7月22日 第10回教会生活研修会

1968年

1月31日—2月3日 第5回トレーニング研究セミナー

その2—教会集団生活指導者研修会及び教会生活研修会日程表

— 第1回より第10回まで —

第1回教会集団生活指導者研修会日程表(1958・7・21-8・1)清泉寮

| | 7月21日 | 22日 | 23日 | 24日 | 25日 | 26日(土) | 27日(日) | 28日 | 29日 | 30日 | 31日 | 1日 |
|-------|-----------------|-----------------------------|-------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|----------------------------|---|---------------------------------|------------------------------|-----------------------------|---------------------------|-------------------------------|
| 午前(1) | | T ₁ | T ₂ | T ₃ | T ₄ | T ₅ | / | T ₆ | T ₇ | T ₈ | T ₉ | T ₁₀ |
| 午前(2) | | Th ₁ M. I. T. | Th ₂ プロセスとコンテンツ | Th ₃ チェアマンのスタイル | Th ₄ シェアー・ドリーダ・シップ | Th ₅ メンバーの機能 | / | Th ₆ コミュニケーションの障害 | Th ₈ 集団団力と集団基準 | Th ₉ ネガティブィティ | Th ₁₁ 社会的変革 | Th ₁₂ グループの発展段階 |
| 午後 | | P ₁ 観察 | P ₂ ロールプレイ | P ₃ チェアマンのスタイル | P ₄ 大集団への参加の問題 | / | / | P ₆ 観察機能 | P ₇ 集団決定 | / | P ₈ 持って帰るもの | P ₁₁ まとめ P L R |
| 夜 | 開会 オリエンテーション | 「教会の使命」 | / | インクレストグループ | / | / | P ₅ 「参加」P ₄ の全体発表会 | Th ₇ 権威と権威主義 | / | Th ₁₀ 逸脱者の問題 | インクレストグループ参加者の夕べ | 閉会 |

T-11, P-8, Th-12

参加 35名 :

スタッフ : カナダ・アメリカより10名
3名(女1)他に会計

領域: 集団生活

設定: 11泊12日, 清泉寮, 参加者35名・スタッフ13名(アメリカ, カナダより10名)

目標: The Purpose of the Laboratory

The corporate life of the Church is the essential medium for communicating the Christian faith. Christian groups which reveal the power of the Holy Spirit are those in which individuals become one in our Lord, reveal this unity in a corporate facing and sharing of their common life, and show forth in the world the power of the Gospel. This sense of Christian community is not as fully known in the Church as it can be known. Therefore, it is the purpose of the laboratory to explore some of the factors and forces which affect our involvement in group life. Under experimental and specialized conditions we will attempt to become more sensitive to these forces and to become more creative and responsible as leaders in the Church.

構成要素: Tグループ10回。毎日午前の第1セッション。最後の日まで。

理論(Th)12回。

グループに関するもの: MIT, プロセスとコンテンツ, チェアマン

のスタイル、シェアード、リーダーシップ、メンバー機能、コミュニケーション、集団圧力標準、ネガティビティ、権威と権威主義、逸脱者の問題、グループの発達段階、

対人に関するもの：コミュニケーション、ネガティビティ。

プラクティス・グループ（P）8回。

観察、ロールプレイ、チェアマンのスタイル、大集団への参加の問題、参加、観察機能、集団決定、もって帰るもの。

その他、礼拝、教会の使命、インタレストグループ

考察：Tグループは毎日1回第1セッションにもたれ（最後のまともなTグループ）ている。理論はグループの領域のものが多い。初期にグループ内現象に関するものが、後半になってグループ及び社会変革に関するものが来る。Pグループは理論で提示された主題に関して、実験、実習を行うようになっている。Tグループ、理論、Pグループの関係はTグループのグループ体験をし、それを次の理論で一般化し、Pグループで練習、再体験、再理論化が起ることをねらったと思われる。

E I A Hの過程を1日の流れの中に組み入れたものと見ることもできる。

第2回教会集団生活指導者研修会日程表（1960・7・18-7・29）清泉寮

| | 7月18日 | 19日 | 20日 | 21日 | 22日 | 23日(土) | 24日(日) | 25日 | 26日 | 27日 | 27日 | 29日 |
|-------|-----------------|------------------------------------|------------------------------|--------------------------------|-------------------------------|-------------------------------|--|----------------------------|-----------------------------------|----------------------------------|------------------------------|---------------------------------|
| 午前(1) | | T ₁ | T ₃ | T ₅ | T ₇ | T ₈ | | T ₁₀ | Th ₉ グループの効果性の概要 | T ₁₂ | P ₆ プロセスコンテンツ | Th ₁₂ クラブによる学習の方法 |
| 午前(2) | | Th ₁ グループの理解 | Th ₃ コミュニケーション | Th ₄ グループの3つのニーズ | Th ₅ リーダーシップの問題 | Th ₆ プロセスとコンテンツ | | Th ₈ 集団決定の問題 | T ₁₁ | Th ₁₀ 計画的変革のダイナミクス | Th ₁₁ グループ間の葛藤 | 現場への適用の問題 |
| 午後 | | T ₂ | | T ₆ | P ₂ 12人の怒れる男 | | | P ₃ | P ₄ チェアマンシップスタイル変革体 | P ₅ コミュニケーションの問題 | P ₇ グループ間の葛藤 | 閉会 |
| 夜 | 開会 オリエンテーション | Th ₂ 新しいメンバーで新しいグループ | T ₄ | P ₁ 問題調査 | 〃 | | Th ₇ 感情の位置 T ₉ | | 特殊問題 神学とグループダイナミクス | 特殊問題 キャリアラム 指導者養成など | PLR 参加者のグループ | |

T-12, P-7, Th-12

参加者 38名（男29, 女9）

スタッフ カナダ・アメリカより4名, 日本人及び在日宣教師, 11名(女1名)

領域：集団生活

設定：11泊12日, 清泉寮, 参加者38名・スタッフ15名

目標：配布されたもの特になし。

構成要素：Tグループ12回, 10日目まで1日1回及至2回。

理論 (Th) 12回。

グループ領域：グループ理解，新しいメンバー新しいグループ，コミュニケーション，グループの3つのニード (MIT)，リーダーシップ，プロセスとコンテンツ，感情の位置，集団決定の問題，グループの効果性，計画的変革のダイナミックス，グループ間の葛藤。

対人の領域：コミュニケーション，感情の位置。

個人の領域：感情の位置。

学習理論：ラブ学習の方法。

P グループ 7回

グループ領域：問題調査，映画「12人の怒れる男たち」メンバー機能，チェアマンスタイル，変革体，コミュニケーション，プロセス・コンテンツ，グループ間の葛藤。

その他，礼拝，特殊問題神学問題とグループダイナミックス，カリキュラム指導者養成（現場適用），参加者の夕べ。

考 察：Tグループは1日1回及至2回，実質最後の3日間は理論化及び現場適用のPグループになっている。PグループはTグループをはきんでおかれ，初期にはグループ理解に関するものが多い。後半には集団決定，変革に関するものが来る。中間で感情の問題にふれている。

Tグループ，理論，Pグループの組合せは第1回と同じねらいと思われるが，更に現場適用を強調したあとがみえる。

第3回教会集団生活研修会実施日程表 (1962・9・4-13) 東山荘

| | 9月4日 | 5日 | 6日 | 7日 | 8日(土) | 9日(日) | 10日 | 11日 | 12日 | 13日 |
|-----------|-------------------|---|----------------------------------|---|-----------------------|--|--|---|--------------------------------|--|
| 午前 (1) | | T ₁ | T ₄ | T ₆ | T ₇ | | T ₁₀ | T ₁₁ | T ₁₂ | 理 ₉ 実 ₈ 神学との 問題 |
| 午前 (2) | | T ₂ | 実 ₁ グループ観 察法 | 理 ₃ 集団圧力 集団標準 | 理 ₄ 指導性 | | 理 ₅ コミュニケ ーション | 理 ₇ 計画的変革 のダイナミ ックス | 理 ₆ 研修会の学 習方法 | 閉 会 |
| 午 後 | 開 会 | 理 ₁ グループの 欲求とメン バーの機能 | 理 ₂ グループ観 察について | 実 ₂ グループ 観察と集 団決定への 影響 (12 人の怒 れる男) | T ₈ | 実 ₄ ロールプレ イ (理 ₄ の補 助) | 実 ₅ かくれた問 題 | 実 ₆ 変革体 | 実 ₇ 現場での通 用 | |
| 夜 | オリエン テーショ ン | T ₃ | T ₅ | 実 ₃ 集団決定 の個人への 影響 | | T ₉ | 理 ₈ 自己像と社 会的相互作用 の循環過程 | | 参加者の夕 | |

T-12, 理-9, 実-8

領 域：集団生活

設 定：9泊10日，東山荘，参加者46名，スタッフ17名

目 標：配布されたもの特になし。

構成要素：Tグループ12回。初めの4日間に8回行っている。

理論（Th）9回。

グループの領域：グループの3つの欲求とメンバーの機能，グループ観察，集団圧力と集団標準，指導性，コミュニケーション，自己像と社会的相互作用の循環過程（以後，CPSIと略），計画変革のダイナミックス。

対人の領域：コミュニケーション。

学習理論：研修会の学習方法。

Pグループ8回

グループ領域：グループ観察，集団決定の個人への影響，ロールプレイ，かかれた問題，変革体。

個人の領域：集団決定の個人への影響。CPSI。

考察：Tグループを半ばに集め，理論はグループのプロセス理解に関するものを初期に，中期にリーダーシップ，そして後期にその現場適用に関するものをやっている。前回までもそうであるが，Pグループは多分に理論的なものを含んでいる。今回はまたグループ観察のように実習を行ったあとで理論を出している。

第4回教会集団生活研修会実施日程表（1963・2・12-22）清泉寮

| | 2月12日 | 13日 | 14日 | 15日 | 16日(土) | 17日(日) | 18日 | 19日 | 20日 | 21日 | 22日 |
|-------|---------------------------------|--------------------------------|--------------------------|--|--------------------------------------|--|--|-----------------------------|-------------------------------|--------------------------------|-----|
| 午前(1) | | T ₂ | T ₄ | T ₅ | T ₇ | | T ₉ | T ₁₀ | T ₁₁ | T ₁₂ | 閉会 |
| 午前(2) | | Th ₁ ラプ学習 | Th ₂ C・P・D | Th ₃ グループ メンバー の機能 | Th ₄ コミュニ ケーショ ン | | Th ₆ 共同学習 | Th ₇ 指導性 | Th ₈ 変化と変 革体 | Th ₁₀ 現場への 適用 | |
| 午後 | | T ₃ | E ₂ 観察 | E ₃ 討議の原 理 | | | (12 人の怒 れる男) E ₄ 集団 決定 | | E ₇ 変化と変 革体 | E ₈ 現場への 適用 | |
| 夜 | オリエン テーション T ₁ | E ₁ アプリケ ーション | | T ₆ | | Th ₅ C.P.S.I T ₈ | E ₅ | E ₆ 事例研究 法 | Th ₉ 共同学習 | 参加者の 夕 | |

T-12, Th-10, E-8

領域：集団生活

設定：10泊11日，清泉寮，参加者58名（宣教師17名）

目標：「この研修会は，参加者全員一参加者，スタッフとも一が出会いを体験する場であります。すなわち，主にある兄弟姉妹であるわたしたちが，たがいに自由かつ責任ある主体として，人間関係の中に作用する諸要因及び自己に対して目を開いて，この期間の生活をともにします。」

構成要素：Tグループ12回。1日1回及至2回平均して開かれている。

理論（Th）10回。

グループの領域：データプロセス・コンテンツ，グループメンバーの機能，コミュニケーション，CPSI，指導性，変革体。

対人の領域：コミュニケーション，CPSI。

※Eグループ8回

グループの領域：観察，討議の原理，集団決定，事例研究法，変革体。

考 察：ねらいの中に、「出会いを体験する場」「自己に対して目を開く」と明記されている。この回が，特に在日宣教師と日本人教会指導者の相互理解を意図して開かれたことのあらわれであろうか。Tグループは一貫して午前の第1セッションにおかれている。理論とEグループの関連づけが強いようである。

※ この回より，Pグループがなくなり，E（Experiment）グループとなった。実質的にはPグループと同じと考えてよい。

第5回教会生活研修会実施日程表（1963・7・2-12）東山荘

| | 7月2日 | 3日 | 4日 | 5日 | 6日(土) | 7日(日) | 8日 | 9日 | 10日 | 11日 | 12日 |
|-----|----------------|------------------------------|----------------------------------|-------------------------------------|----------------|----------------|-----------------------------------|-----------------------------------|----------------------------|---|---------------------------------|
| | | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 | 聖書研究 | | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 |
| 午 前 | | T ₂ | T ₄ | T ₅ | T ₇ | | T ₉ | T ₁₀ | T ₁₁ | T ₁₃ | G ₁₁ 教会に於けるトレーニング |
| 午 前 | | G ₁ グループ理解について | G ₃ プロセス・コンテンツ・データ | G ₄ コミュニケーション・かくされた問題 | | | G ₅ 自己概念 C.P.S.I | G ₇ リーダーシップ | G ₈ 社会変革と変革体 | T ₁₄ | 閉 会 |
| 午 後 | | T ₃ | E ₁ 観 察 | E ₂ 機能役割 | | | E ₃ ロールプレイ | | E ₅ 映画 続き | G ₉ ラボラトリー 学習 G ₁₀ 共同学習 | |
| | 開 会 | 聖書研究 | 聖書研究 | 聖書研究 | | | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 | | |
| 夜 | T ₁ | G ₂ コミュニケーショ | | T ₆ | | T ₈ | G ₆ 集団決定 | E ₄ 映 画 12人の怒れる男 | T ₁₂ | 参加者の夕べ | |

T-14, G-11, E-5

領 域：集団生活

設 定：10泊11日，東山荘，参加者66名

目 標：特に記録なし。

構成要素：Tグループ14回。

※Gセッション（理論）11回。

グループの領域：グループ理解，コミュニケーション，プロセス・データ・コンテンツ，かくされた問題，リーダーシップ，社会変革と変革

体, C. P. S. I.。

対人の領域：コミュニケーション。

個人の領域：自己概念と C. P. S. I.。

現場適用の領域：教会に於けるトレーニング。

E グループ 5 回

グループの領域：観察，機能と役割り，ロールプレイ。

その他

聖書研究，参加者の夕べ

考 察：Tグループが多くなっている。Tグループにより強調点が変わって来た
あらわれである。Tグループがウェイトを増すとそれだけEグループと
の関連づけが難かしくなる。Eグループは前回より減少している。

※ この回より，理論をGセッションとした。「理論」の先入観をさ
ける，理論とEグループとの関連を増す，より自由な提示方法を含
みうることで，科会科学的な理論の提示だけでなく，経験の一般化，
理論化をここでも行うといった理由から。

第 6 回教会生活研修会実施日程表 (1963・10・1-11) 東山荘

| | 10月1日 | 2日 | 3日 | 4日 | 5日(土) | 6日(日) | 7日 | 8日 | 9日 | 10日 | 11日 |
|--------|----------------|--------------------------|---|-----------------------------------|-----------------|-----------------|---|---------------------------------------|--|---|---------------------------|
| 午 前 | | T ₂ | T ₅ | T ₈ | T ₁₁ | | T ₁₃ | T ₁₅ | T ₁₇ | N ₁ N ₂ 今迄の体験 で自分のも っている 課題を追求 する。 | G-8 まとめ 集会の訓 練 |
| 午 前 | | T ₃ | G-2 対人的 コミュニケ ーションに ついて 対人理解 | T ₉ | | | G-4 集会的対人 相互作用の 循環過程 | G ₆ 集団にお ける機能 的行動 | T ₁₈ | | ラブの訓 練につい て。 閉 会 |
| 午 後 | 開会式 | G-1 社会的学 習につい て | T ₆ | T ₁₀ | | | T ₁₄ | G-7 共同学習 (役割観 察) | | N ₃ 生活の場 に於いて Labの体 験をいか に生かす か 総合討議 | |
| 夜 | T ₁ | T ₄ | T ₇ | G-3 映画 「12人の 怒れる男 たち」 | | T ₁₂ | G-5 共感的人 格関係と アクテ ィブリス ニング | T ₁₆ | タウン・ミ ーチング ことでの体 験が有効 になるた めに振り をどうす るか | 参加者の 夕べ | |

T 1 8, G-8, N-3

領 域：集団生活

設 定：10泊11日，東山荘，参加者42名

目 標：特に記録されたものなし。

構成要素：Tグループ18回。

Gセッション8回。

グループの領域：CPSI，集団における機能的行動，役割観察，映画。

対人の領域：対人コミュニケーション，積極的傾聴法。

E グループ なし。

N グループ 3 回

その他

タウンミーティング

考 察：T グループが 18 回，E グループはなくなり，タウンミーティングの後，N グループとして旧 T グループ・メンバーが集まっている。G セッションの中にこれまでは E グループで行っていたことを含めている。G セッションが T グループで起っていることを明確化すると共に，T グループの中での個々人の動きを促進するような要素になっている。

第 7 回教会生活研修会実施日程表（1964・6・30-7・10）東山荘

| | 6月30日 | 7月1日 | 2日 | 3日 | 4日(土) | 5日(日) | 6日 | 7日 | 8日 | 9日 | 10日 |
|----|-------|----------------|-----------------------------|------------------------|---------------------|--------------------------------|---------------------|-----------------|----------------|----------------|-----------------------|
| 8 | | | | 聖書研究 | 聖書研究 | | | | | | |
| | | 礼 拜 | 礼 拜 | 朝食 | 朝食 | | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 |
| 9 | | 朝食 | 朝食 | インタビュー | インタビュー | | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 |
| | | インタビュー | インタビュー | | | | | | | | |
| 10 | | T ₂ | T ₅ | T ₇ | T ₁₀ | | T ₁₁ | T ₁₄ | E ₁ | E ₅ | G ₇ Labの体験 |
| | | | | | | | | お茶 | | | |
| 11 | | | | | | | | | | | |
| | | T ₃ | G ₁ グループの動き | G ₃ C.P.S.I | G ₄ 自己理解 | | T ₁₂ | T ₁₅ | E ₂ | E ₆ | 閉会礼拝 |
| 12 | | | | | | | | | | | |
| | | 昼 食 | 昼 食 | 昼 食 | 昼 食 | | 昼 食 | 昼 食 | 昼 食 | 昼 食 | |
| 1 | | | | | | | | | | | |
| | | 自 由 お 茶 | G ₂ 対人関係における自己理解 | T ₈ | | | 自 由 | 自 由 | E ₃ | E ₇ | |
| 2 | | | | | | | | | | | |
| | | 受付 | 自 由 | お 茶 自 由 | お 茶 自 由 | | G ₆ 集団圧力 | | | | |
| 3 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 4 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 5 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 6 | | 礼 拜 | 聖書研究 | 聖書研究 | | | 礼 拜 | 礼 拜 | 礼 拜 | | |
| | | 開会礼拝 | 夕 食 | 夕 食 | 夕 食 | | 夕 食 | 夕 食 | 夕 食 | 夕 食 | |
| 7 | | | インタビュー | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 8 | | T-卵 | T ₄ | T ₆ | T ₉ | G ₅ リーダーとはだれのことでしよう | T ₁₃ | T ₁₆ | E ₄ | 自主的に集る自由 | |
| | | | | | | | | | | | |
| 9 | | | | | | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | |
| 10 | | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | |

T 16, G 7, E-7 ※ E は，礼拝，食事，お茶，入浴の時間を示めし，グループで自由につかう。

領 域：集団生活

設 定：10泊11日，東山荘，参加者57名

目 標：記録されたものなし

構成要素：T グループ 16 回。

G セッション 7 回

グループの領域：グループの動き，C.P.S.I.，リーダーシップ，集団基

準と集団圧力。

対人の領域：対人関係に於ける相互理解。

個人の領域：自己像。

学習理論：ラブ体験

その他

インタレストグループ

Eグループ

グループの領域：5つのグループに分れ、各々異ったことを行う。ロールプレイ、子供にかえってのゲーム、印象テスト、ブレン・ストーミング、フィードバックなど。

考察：Tグループ16回を集中して先に行い、最後はEグループを集めている。またGセッションはTグループの動きを促進するものが入れている。

Tグループで体験したものを理論で説明し、理解を深めたところでPグループで練習するといった初期の頃の方法とは異なり、Tグループ体験を深めた後にEグループで現場適用のための学びを行っている。

第8回教会生活研修会実施日程表(1965・7・6-16)東山荘

| | 7月6日 | 7日 | 8日 | 9日 | 10日 | 11日 | 12日 | 13日 | 14日 | 15日 | 16日 |
|----|----------------|-----------------------------|-------------------------------------|-------------------------------------|----------------|---|-----------------------------|---------------------------|---------------------------|------------------------|------------------------|
| 午前 | | T ₂ | T ₅ | T ₈ | T ₉ | / | T ₁₁ | T ₁₃ | T ₁₄ | T ₁₆ | G ₉ ラブ学習 |
| 午前 | | T ₃ | G ₂ データ・プロセス コンテント | G ₃ フィードバック (四つの窓) | / | / | G ₅ 自己概念 | G ₆ C.P.S.I | G ₇ リーダーシップ | E ₈ | |
| 午後 | | G ₁ コミュニケーション | T ₆ | E ₁ (MIT) | / | / | E ₃ ロールプレイ・観察 | E ₄ | E ₆ フィードバック | E ₉ | |
| 夜 | T ₁ | T ₄ | T ₇ | E ₂ M.I.T. | / | G ₄ フィーリング T ₁₀ | T ₁₂ | E ₅ | E ₇ | G ₈ 共同学習 | |

T-16, G-9, E-9

領域：集団生活

設定：10泊11日，東山荘，参加者57名，スタッフ23名

目標：「教会生活研修会とは……」

私たちみんなが日頃の生活の場からはなれて、今、ここでの“出会い”を体験する場があります。集団生活におこる事柄に気づくと共に、自己に対して目を開き、お互いが自由且つ責任ある主体として生きることを学びます。」

構成要素：Tグループ16回。

Gセッション9回。

グループの領域：データプロセス・コンテンツ，CPS I，リーダーシップ，フィードバック。

対人及び個人の領域：コミュニケーション，フィードバック，フィードバック，自己概要。

ラブ学習：

現場適用：

Eグループ9回。

グループの領域：ロールプレイを観察，集団決定など。

考察：ねらいは対人及び個人の今ここでの経験に焦点が合わされている。

GセッションとEグループが前回よりも増加，またEグループは2こま続きで行っている。そのため長時間を必要とする実習が出来る。

第9回教会生活研修会実施日程表(1966・7・5-15)東山荘

| | 7月5日 | 7月6日 | 7月7日 | 7月8日 | 7月9日 | 7月10日 | 7月11日 | 7月12日 | 7月13日 | 7月14日 | 7月15日 |
|----|----------------------|----------------|----------------|----------------|-----------------|------------------|----------------------------|------------------------------|---------------------------------|---------------------------|--------------------------|
| 8 | | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 | | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 |
| 9 | | | | | | 朝食 | | | | | |
| 10 | | T ₂ | T ₅ | T ₈ | T ₁₁ | 礼拝 | T ₁₄ | T ₁₇ | T ₁₉ | T ₂₁ | |
| 11 | | | | | | | | G ₄ グループの動きに目をひらく | G ₅ グループが全体で1つの問題を解決 | G ₇ Tグループで問題解決 | 閉会礼拝 |
| 12 | | T ₃ | T ₆ | T ₉ | T ₁₂ | | T ₁₅ | | | | |
| 1 | | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 |
| 2 | | お茶 | | | 自由 | クリエイティブ・創造的・自己表現 | G ₄ 対人コミュニケーション | ソフトボール大会(T対抗) | 少しでも過程を学ぶ | ソフトボール大会(自由) | インクレストグループG ₈ |
| 3 | 受付 | | お茶 | お茶 | お茶 | | お茶 | | | | |
| 4 | | | | | | 自由 | | | | | |
| 5 | | 夕拝 | 夕拝 | 夕拝 | 夕拝 | | 夕拝 | 夕拝 | 夕拝 | 夕拝 | |
| 6 | | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 野外夕食会 |
| 7 | 開会礼拝 夕食・オリエンテーション | | | | | | | | | | |
| 8 | | T ₁ | T ₄ | T ₇ | T ₁₀ | レクリエーション | T ₁₃ | T ₁₆ | T ₁₈ | T ₂₀ | T ₂₂ |
| 9 | | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 |
| 10 | | | | | | | | | | | |

T₂₂，G-9

領域：集団生活

設定：10泊11日，東山荘，参加者41名，スタッフ10名

目標：「教会生活研修会とは…この研修会の期しているものは，集団生活

の中で、自己、他者のあり方をみずから体験しつつ、より効果的、創造的な生き方を発現することにある。」

構成要素：Tグループ22回。

Gセッション9回。

グループの領域：Tグループの問題を考察，グループの動きに目をひらく，グループが問題を解する過程を学ぶ，Tグループに問題解決。

対人及び個人の領域：対人コミュニケーション，感情表現，創造的自己表現。

その他

インタレストグループ，パネル討議「研修会を語る」

Eグループなし。

考察：Tグループが22回と増加しており，Tグループを中心にGセッションは進んだ。即ち前半はTグループの動きを促進するGセッションとして感情表現，Tグループの問題，創造的自己表現，後半にはTグループメンバーでGセッションを構成して問題解決作業を行っている。

また，すでにあった理論の提示というよりは参加者が中心になって展開するものとなっている。これは第7回のデザインに共通点のみる。

この回に初めてカトリック教会からの参加があった。

第10回教会生活研修会実施日程表(1967・7・14-22) 東山荘

| | 7月16日 | 7月17日 | 7月18日 | 7月19日 | 7月20日 | 7月21日 | 7月22日 |
|----|-------|---------------------------|---------------------------|----------------------------------|-------------------------|------------------------|------------------|
| 8 | 礼拝 | 礼拝 | 礼拝 | 礼拝 | 礼拝 | 礼拝 | 礼拝 |
| 9 | | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 | 朝食 |
| 10 | | T-2 | T-6 | T-9 | T ₁₂ | T ₁₅ | T ₋₁₆ |
| 11 | | | | | | | 閉会礼拝 |
| 12 | | T-3 | T-7 | T ₁₀ | T _B | T ₁₆ | |
| 1 | | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | 昼食 | |
| 2 | | 自由 | 自由 | G ₂ クリエイティブ ビティ | G ₋₃ 協力選程 | G ₄ 集団決定 | |
| 3 | | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | |
| 4 | | T ₄ | G ₋₄ ムーブメント | 自由 | 自由 | 自由 | |
| 5 | | 自由(入浴) | 入浴 | 入浴 | 入浴 | 入浴 | |
| 6 | | 開会礼拝・全体集会 夕食・オリエンテーション | 夕食 | 夕食 | 夕食 | 夕食 | |
| 7 | | | | | | | |
| 8 | | T-1 | T-5 | T-3 | T ₁₁ | T ₁₄ | T ₁₇ |
| 9 | | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 | お茶 |
| 10 | | | | | | | |

T₁₈ G₄

領域：集団生活

設定：6泊7日，東山荘，参加者79名，スタッフ15名

目標：私たちの日常生活の状況の中で，

(1) 他の人がどのような内的体験をし，どのような行動をしており，その行動がどんな結果を生じているか。

(2) また，そこで，自分の中ではどのような体験がおこっているのか，どんな感じ，思い，考えが動き，流れているのか。自分はどのような，はたらきをしているのか。ということ，体験的に感じとり，その状況のなかで自分がより自然に在るための新しい生き方，動き方を見出す。（以上が委員長の挨拶の中で提示された）

構成要素：Tグループ18回。

Gセッション 4回。

グループの領域：協力過程，集団決定，

個人の領域：ムーブメント，クリエイティビティ。

考察：期間が短縮されたがTグループは減少していない。Tグループが中心である。GセッションはTグループの学びの促進のためにデザインされている。後半ではTグループごとに現場適用を考慮した集団決定を行っている。

参 考 資 料

- 「ラボラトリー方式による人間関係訓練」 柳 原 光
JICEシリーズ№1 ヒューマンリレーションズトレーニング
- 「第2回 教会における集団生活指導者研修会記録」
日本基督教協議会教会学校部
グループ・ダイナミックス委員会
- 「立教大学JICE通信」
立教大学キリスト教教育研究所
第1号 — 第15号
- 「教会生活研修会記録」第3回—第10回， 1962 — 1967
立教大学キリスト教教育研究所